

会話における日本語学習者の文末表現 —文末表現の種類別出現率と習熟度との関連—

The sentence-end patterns in conversations of Japanese language learners: How the occurrence ratios of sentence-end patterns relate to the proficiencies

庄山 建一 (千葉大学文学部卒業生)

Kenichi SHOYAMA (graduated
from Faculty of Letters, Chiba University)

Abstract

The sentence-end expressions of Japanese language in everyday conversation have many patterns: forms with sentence-ending particles('ne', 'yo', etc.), conjunctive forms('kedo', 'te', etc.) and the rest except for plain forms. This study investigated the sentence-end patterns in free conversations between Japanese language learners and native speakers and analyzed the features of the learners' patterns by comparison with the natives'. The result suggests the possibility of the following: 1. Advanced level learners' occurrence ratios of sentence-end patterns are nearer to natives' than intermediate level learners' are, and superior level learners' are not nearer than advanced level learners' are. 2. The uses of plain forms by learners, especially by superior level learners, have noticeable feature which is very different from natives' feature. 3. Probably superior level learners make their own norms on Japanese language use and that causes these features of superior level learners.

1. はじめに

日本語の会話の文末は、書きことばとは異なり、用言の終止形そのもので終わることは少ない。メイナード(1993)は、そのような文末形式(「裸のダ体」)は 11.98%に過ぎないが、米会話ではそれに相当する「命題に直接関係ある語彙のみで成り立っている文」が 89.93%になると述べている。しかしこのような研究は、特に日本語学習者については非常に少ない。したがって日本語学習者や母語話者の文末表現使用の実態を把握することは、自然な会話運びができる能力の養成を検討する上で、意味があると思われる。

本調査では、文末表現の形式により各文を分類して各種類の出現率を算出し、日本語学習者のデータを母語話者のデータと比較することにより、①日本語学習者の文末表現と習熟度との対応関係、②日本語学習者の文末表現の特徴(特に終止形で終わっている文の使い方)について分析する。また、③日本語学習者の文末表現使用に関わる言語意識についても併せて分析する。なお、各種類のうち終止形で終わっている文(本稿では以下「動詞等 φ 形」と呼ぶ)、終助詞で終わっている文、述語省略の文に焦点を当てて考察する。

2. 先行研究

まず 2.1 で発話データのすべての文末表現の出現率を算出して分析している研究を、次いで 2.2 で言語学習者の言語意識・規範意識に関する研究を取り上げる。なお、本稿においては、言語意識は「言語使用ないし言語行動についての志向意識」(杉戸清樹 1992:115)¹を指すものとし、規範(言語規範)は文法や発音等、直接教育項目と結びつくものに限定せず広義にとらえ、また、個人的な規範をも含むものとする。

2.1 文末表現使用に焦点を当てた研究

文末表現については、終助詞文(大曾 1986 ほか)や「裸の文末形式」(上原・福島 2004, 黒沢 2010 ほか)など一部の形式を対象にした研究は少なくないが、発話のすべての文末形式の出現を調査・分析したものは非常に少ない。

メイナード(1993:81-126)は、日米における大学生(同性の友人同士)の日常会話のデータにより、会話のことばの特徴について対照分析を行っており、その中に日本語の文末表現の種類別出現率分析がある。そこでは、「裸のダ体」が上記のとおりごく少ないことのほかに、終助詞が圧倒的に多い(35.05%)こと等が報告されている。また、「裸のダ体」は、急に思い出したときなど、相手に向けて発話の形を整える余裕のなかったときや、同調して相手の発話をリズムカルに繰り返すとき等、ごく限られた場合にしか使われないことが指摘されている。

峯(1995)は、文末表現の習得過程を明らかにするため、日本語学習者(留学生)との対話のデータにより、縦断的・横断的な分析を行っており、終助詞「ね」「の」「よ」等について学習者のレベルに応じた習得の段階が認められること、レベルに応じて表現形式が増えていくこと、母語の影響よりも個人の会話スタイルや学習環境等の個人差が文末表現に反映されていることを指摘している。

伊集院(2004)は、初対面の大学生同士(同性)の母語場面・接触場面²の会話における、日本語母語話者のスピーチスタイルシフト(デス・マス体の出現率の時間的変化)等について分析しており、母語場面と接触場面とではスピーチスタイルシフトのメカニズムが異なること、接触場面では母語場面に比べてデス・マス体が減少し、ダ体が増加していることなどを指摘している。

なお、いずれの研究も日本語学習者について母語話者と対比した分析は行っていない。本調査では、メイナード(1993)を参照して、接触場面の文末表現について、日本語学習者と母語話者とを対比して分析する。

2.2 言語意識に焦点を当てた研究

ファン(2003)は、日本語学習者(留学生)の日本語使用についての規範意識をフォローアップインタビュー³から抽出し、会話データと照合して分析しており、日本語学習者が学習者同士で日本語を話す場合には、敬語を省略する、外来語の使用を控えるなど、日本語使用についての規範が母語話者と話す場合とは異なっていることを明らかにしている。また、母語話者と話す場合でも外来語使用などには葛藤がある学習者のケースを報告している。

窪田(2005)は、米大学付属英語学校の、社会言語学的能力習得を目的とする上級者向けコースで取得したデータにより、学習者がアメリカ英語の特徴を取り入れていく過程を分

析しており、学習者が母語話者の規範を葛藤や選択を通して自分なりのものに調整していく様子を報告している。

これらの研究は、学習者が母語話者の規範をそのまま取り入れるのではないことを明らかにしており、本調査の分析に示唆を与えるものである。なお、接触場面の、言語規範を含むインターアクション規範の管理については、高(2006)、村岡(2006)、加藤(2010)などの研究がある。

3. 調査方法

3.1 データ収集

大学に在籍している留学生(非母語話者、以下 NNS)と日本人学生(母語話者、以下 NS)との同性のペア 14 組(表 1 参照)に、それぞれ 20 分間日本語で自由に会話をしてもらって録音し(調査者はその間退出)、そのうち 10 分間分(基本的には収録開始 5 分後から⁴)を文字化⁵した。その 14 組合計 2 時間 20 分の文字化資料から文を切り出した。また、会話収録後 1 週間以内(超級 NNS 1 名、中級 NNS 1 名のみ 2 週間以内)にフォローアップ・インタビュー(以下 FUI)を行い、話し方に対する意識等(特に、例えば普通体・丁寧体、終助詞等、文末について気をつけていることや方針など)についてたずねた。

表 1：調査対象者

NNS						NS		
記号	性別	出身	母語	日本語能力	日本滞在歴	記号	性別	出身
L01	女	中国	中国語	超級	4 年 3 か月	J01	女	東京都
L02	女	ケニア	英語, スワヒリ語	〃	4 年 3 か月	J02	女	宮城県
L03	男	アルゼンチン	スペイン語	〃	4 年 3 か月	J03	男	岐阜県
L04 *	女	中国	中国語	〃	8 年	J04 *	女	秋田県
L05 *	女	中国	中国語	〃	2 年 4 か月	J05 *	女	北海道
L06 *	女	韓国	韓国語	〃	2 年 7 か月	J06 *	女	秋田県
L07	女	インドネシア	インドネシア語	上級	10 か月	J07	女	宮崎県
L08	女	スリランカ	シンハラ語	〃	1 年 9 か月	J08	女	群馬県
L09	男	ドイツ	ドイツ語	〃	9 か月	J09	男	鹿児島県
L10 *	女	ベトナム	ベトナム語	〃	5 年 10 か月	J10 *	女	千葉県
L11 *	男	韓国	韓国語	〃	1 年 4 か月	J11 *	男	石川県
L12 *	女	中国	中国語	〃	2 年 2 か月	J12 *	女	千葉県
L13	女	モンゴル	モンゴル語	中級	1 年 9 か月	J13	女	福岡県
L14	女	タイ	タイ語	〃	9 か月	J14	女	千葉県

NNS の日本語能力は中級から超級までであるが、ACTFL 言語運用能力基準⁶を参考にし、分類した。大学の日本語学習クラス(中級, 上級)⁷に在籍している者についてはそのレベルと一致することを確認した。日本語学習期間についても尋ねたが、学習期間の判定がきわめて困難であることから、表 1 には記載しなかった。年齢はほとんどが 20 代で、J09～J12 の 4 名だけが 19 歳である。ペアの 2 人の親しさの程度は、親友から授業で一緒になる程度までさまざまであり、初対面は L10・J10 のペアだけである⁸。なお、L01 と J01 というように同じ数字の者がペアになっている。会話の収録時期は 2 つに分かれており、第 1 次は 2005 年 6 月 16 日から同年 8 月 5 日まで、第 2 次は 2011 年 1 月 21 日から同年 10 月

31 日までで、記号のあとに*印を付したペアが第 2 次である。

3.2 分析の枠組み

3.2.1 文および文末の認定

文の認定は、メイナード(1993:98-99)では、明らかに用言が省略されていると考えられる場合は用言なしでも文とみなす、テ形で終わる表現も文末の下降調のイントネーションを伴う場合は文とみなす、従属節と考えられるものも主節が省略されている場合は文とする等の判定方法によっている。本調査では、メイナード(1993)を参考にしておもにイントネーションにより判定したが、複雑な構文の場合、国立国語研究所(1960:2-4)の、文の認定についての記述にもとづいて構造から判断した⁹。ただし、繰り返し文(「ほんとほんと」等)は、同書では繰り返し部分 1 つごとに文と見なしているが、本調査ではセットで 1 つの文とみなした。前半と後半ではイントネーションが異なり(前半高く、後半低い)、1 セットの発話と感じられるからである。なお、①感動詞のみの発話、②文末が不明瞭な発話、③引用だけの発話や日本語以外の発話は集計から除外した¹⁰。

通常は上記により認定した文の末尾が文末であるが、補足の表現が末尾に付加されている倒置文等の場合は、補足の部分を除いた末尾を文末とした。

3.2.2 文末表現の分類

メイナード(1993:120)を参考にして各文を文末形式により表 2 のように分類し、各種類の頻度およびその割合(出現率)を個人別、レベル別に算出した。なお、「動詞等 φ 形」はメイナード(1993)の「裸のダ体」(普通体)や上原・福島(2004)の「裸の文末形式」(普通体・丁寧体)に相当する。

表 2：文末表現分類

分類項目	文末の形式
動詞等 φ 形 ¹¹	動詞、補助動詞、形容詞、形容動詞、繫辞の終止形で終わっている文(非過去・過去、肯定・否定、普通体・丁寧体)。(動詞の終止形の例：「書く」「書いた」「書かない」「書かなかった」「書きます」「書きました」「書きません」「書きませんでした」)
終助詞	終助詞・間投助詞で終わっている文。ただし「か」は除く。
助動詞	「だろう」「でしょう」「じゃない」「らしい」「う・よう」「したい」「かもしれない」等で終わっている文
接続形式	まだ続く形で終わっている文。下位分類に接続助詞等、テ形等がある。
述語省略	述語が部分的または完全に省略されている文。下位分類に語尾等省略、名詞・形式名詞+助詞、名詞、形式名詞、連用修飾語、連体修飾語がある。
終助詞「か」	終助詞「か」で終わっている文。(終助詞「か」は、書きことばにも使われる特殊な終助詞であるため、本調査では一般の終助詞には含めず、独立した分類項目とした。)
依頼・命令形式	テ形や命令形で終わっている依頼・命令の文(「～して」「～してください」他)
発話打ち切り	言いよどみや相手の発話により発話を途中で打ち切っている場合

3.2.3 動詞等 φ 形の機能の分類

「動詞等 φ 形」については、メイナード(1993)や上原・福島(2004)に倣ってその特徴を明らかにするため、機能による分類を試みた。

表 3：動詞等 φ 形の機能分類

分類項目	説 明
① 要求・応答	質問・確認・依頼等疑問文の発話と応答の発話(指示への応答を含む). 例：(質問)「あまりない?」, (応答)「まだまだ少ない」
② 思い出し・気づき・初耳・驚き [瞬][独]	急に思い出したり, 気づいたり, 初耳だったりした場合等の(驚きの)発話. 「～んだ」文の多くを含む. 例：「えっ, まてよ, わたし世界地図があった」, 「そうなんだ」, 「すごい」「あー, びっくりした」
③ ひとり言的・話しながら確認 [独]	相手をあまり意識していないひとり言的な発話や, 話しながら自分自身で確認する発話, 自分にも言い聞かせるような発話. 例：(ことばに詰まり)「うーん, 説明ができない」, (ページをめくって確認しながら)「これは全部読んだ」
④ 同調・共作 [瞬] (部分的に[独])	「同調」は相手の発話に同調し, 調子を合わせるような発話. 「共作」は相手の発話を引き取って文を完成させるような発話. 例：(「多いじゃん」に対して)「多い」, (物価の話題で「日本に来てやっぱり」に対して)「たかーい」
⑤ 眼前描写・回想 [独]	歴史的現在で眼前描写あるいは回想のように話す発話. 例：(たばこの煙がひどい状況を説明していて)「なにも見えなくなる」
⑥ 推測(助動詞的) *	助動詞的な「～と思う」の形式の発話 ¹² . ただし, 他の機能(例えば応答)があれば, そちらに分類した. 例：「専攻は全然日本と関係ないと思う」
⑦ 強調(各種形式) *	繰り返し文や, 「～んだ」文, 語彙・発声などによりやや強調した発話. ただし, 他の機能(例えば同調・共作)があれば, そちらに分類した. 例：「いやほんとです, ほんとです」, 「わたし今度イタリアへ行くんだ」, 「でっかい」, (強調した声で)「こわいっ」
⑧ 丁寧	①～⑦のような目立った機能はない, 丁寧体の判断叙述の発話. 例：「かわいいです」
⑨ その他(単純判叙文)	①～⑦のような目立った機能はない, 普通体の判断叙述の発話. 例：「バイトやれば, すぐ分る」
分類項目欄の凡例： [瞬]－瞬時性：相手に向けて形を整える余裕や必要がなかったときの発話(メイナード 1993), とっさに対応して瞬時に行う発話(上原・福島 2004)に当たるもの. [独]－独話性：独話や独話的なニュアンスを伴う発話(上原・福島 2004)に当たるもの. * -- 本調査で独自に加えた項目.	

国立国語研究所(1960:4-5)では, 文を「表現意図」により詠嘆表現, 判叙表現, 要求表現(質問的表現, 命令的表現), 応答表現に分類している.

メイナード(1993:122-124)は, 大学生(同性の友人同士)の会話のデータを用い, 「裸のダ体」(普通体のみ)の使用例として, 急に思い出したとき, 眼前描写するとき, 相手の発話をリズムカルに繰り返すとき, 発話を共作するときの 4 つのケースを例示しており, これらは「話者が他に向けて形を整える余裕がなく, 又は必要性がなく, 思考や経験をそのまま表現した「裸」のままの姿のようである」と述べている.

上原・福島(2004)は, 初対面(女性同士, 30 代～50 代)の丁寧体を基調とした会話データを分析し, 「裸の文末形式」(普通体・丁寧体)は「話者が意図や情報を表明したり伝達したりするだけで足りる(それ以外の聞き手に対する含みなどを加えない場合)」に使用されると指摘している. そしてこの場合で, 独話や回想あるいはとっさに対応して瞬時に行う

発話(共感, 納得, とっさの判断等で, 独話的なニュアンスを伴う)など, 聞き手を(一時的に)意識しない状況での発話は普通体になり, 意識する状況での発話(返答, 意図や情報の表明・伝達)は, 基調が丁寧体であれば丁寧体になると述べている。

以上の分類や用法はいずれも文の機能と考えられるが, 国立国語研究所(1960)の分類の判叙表現は, 分類のレベルが他と異なっており, この判叙表現にはメイナード(1993)のすべての例と, 上原・福島(2004)の, 返答を除いたすべての用法が含まれると考える。本調査のすべての「動詞等 ϕ 形」を分類するため, 以上の機能を整理し, 類似の機能はまとめ, 本調査で独自に見いだした機能を追加して, 表 3 を作成した¹³。これにより「動詞等 ϕ 形」を分類し, 各種類の頻度および出現率を個人別, レベル別に算出した。

3.2.4 言語意識

会話データの個人別集計結果と FUI のデータとを照合することにより, NNS の言語意識が文末表現にどのような影響を与えているかを分析した。

4. 分析と考察

4.1 文末表現の概要

文末表現の出現率を表 4 により見てみる。合計では NS, NNS とともに, 「終助詞」の出現率がもっとも高く, 「述語省略」と「動詞等 ϕ 形」とがこれに続く。この 3 種類で NS, NNS とともに 80%を占め, かつ日本語習熟度レベルごとの特徴がこれらによく現れているので, 以下この 3 種類を中心に分析する。なお, 個人別に見ても, 「接続形式」の出現率が比較的高い 3 人(J08, L06, L11)を除いては, この 3 種類より高い出現率のものはない。

表 4 : 文末表現集計表

			動詞等 ϕ 形	終助詞	助動詞	接続形式	接続助詞等	て形等	述語省略	語尾等省略	名詞・助詞形式名	名詞	形式名詞	連用修飾語	連体修飾語	終助詞「か」	依頼・命令形式	発話打ち切り	計
件数	NNS	超級計	172	163	37	54	45	9	161	27	28	87	1	17	1	11	3	20	621
		上級計	101	157	27	41	35	6	106	19	17	55	2	12	1	11	7	12	462
		中級計	31	20	0	5	4	1	55	12	10	28	0	5	0	2	0	8	121
		計	304	340	64	100	84	16	322	58	55	170	3	34	2	24	10	40	1204
	NS	計	263	450	71	101	70	31	290	43	54	145	7	30	11	32	3	37	1247
%	NNS	超級計	27.7	26.2	6.0	8.7	7.2	1.4	25.9	4.3	4.5	14.0	0.2	2.7	0.2	1.8	0.5	3.2	100.0
		上級計	21.9	34.0	5.8	8.9	7.6	1.3	22.9	4.1	3.7	11.9	0.4	2.6	0.2	2.4	1.5	2.6	100.0
		中級計	25.6	16.5	0.0	4.1	3.3	0.8	45.5	9.9	8.3	23.1	0.0	4.1	0.0	1.7	0.0	6.6	100.0
		計	25.2	28.2	5.3	8.3	7.0	1.3	26.7	4.8	4.6	14.1	0.2	2.8	0.2	2.0	0.8	3.3	100.0
	NS	計	21.1	36.1	5.7	8.1	5.6	2.5	23.3	3.4	4.3	11.6	0.6	2.4	0.9	2.6	0.2	3.0	100.0

「終助詞」の出現率は, NS(36.1%)ではメイナード(1993)のデータ(35.05%)に近く, NNS では習熟度レベルにより大きく異なっている。中級(16.5%)では NS の半分以下であり, 上級(34.0%)では NS に近いが, 超級(26.2%)では, 中級よりは高いものの上級より 8%, NS より 10%低い。

「述語省略」の出現率は, NS(23.3%)ではメイナード(1993)のデータ(26.78%)に比較的近

く、NNS ではやはり習熟度レベルにより異なっている。中級(45.5%)では NS の倍近くであるが、上級(22.9%)では NS とほとんど同じであり、超級(25.9%)も比較的 NS に近い。なお、「述語省略」は、NS、NNS とともに体言止め(名詞)が約半数を占める。

「動詞等 φ 形」の出現率は、NS(21.1%)ではメイナード(1993)のデータ(11.98%)より 10% 近く高いが、本調査のデータはメイナード(1993)のデータとは異なり接触場面の会話なので、その違いが反映しているのではないかと推測される。NNS は、習熟度レベルによる違いは大きくないが、中級(25.6%)では NS より 5%ほど高く、上級(21.9%)では NS とほとんど同じであり、超級(27.7%)では NS や上級より 6~7%ほど高くなっている。

図 1 により NNS の習熟度レベルに応じた変化について見てみる。中級では文を完成できないことが多いので、NS や上級、超級に比べて「述語省略」の多さが目立ち、まずは文を完成させることが目標となるため、「終助詞」が「動詞等 φ 形」より少ない。上級では「述語省略」が減り、終助詞の使い方にも習熟して「終助詞」が増え、NS の出現率に近くなる。しかし、超級では終助詞の使い方に一層習熟しているにもかかわらず、再び「終助詞」が減り、今度は「動詞等 φ 形」が増えて、NS の出現率からまた離れる。

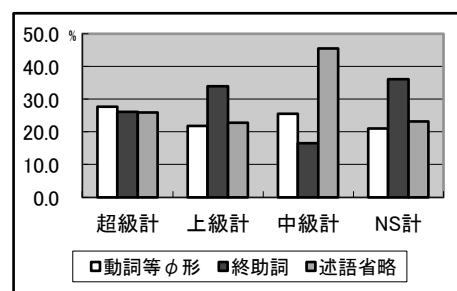


図 1: 主要 3 種類の出現率(レベル別)

4.2 動詞等 φ 形の機能の概要

NNS の「動詞等 φ 形」の使い方には、学習者言語を考える上で鍵となる大きな特徴があり、それが「動詞等 φ 形」の機能別出現率に現れている。まず、表 5 により出現率(NS、NNS いずれか)の高い機能から順に見ていく。

表 5: 動詞等 φ 形機能集計表

			① 要求・ 応答	② 思 い・ 出 し 耳 ・ 気 驚 づ き	③ 話 し な が ら 言 的 ・ 確 認	④ 同 調 ・ 共 作	⑤ 眼 前 描 写 ・ 回 想	⑥ (助 動 詞 的) 推 測	⑦ (各 種 形 式) 強 調	⑧ 丁 寧	⑨ (単 純 判 叙 文) そ の 他	計
件数	NNS	超級計	57	11	8	10	4	3	4	10	65	172
		上級計	37	16	9	7	0	5	1	4	23	102
		中級計	18	0	0	0	0	1	1	2	9	31
		計	112	27	17	17	4	9	6	16	97	305
	NS	計	114	81	26	20	1	2	8	4	7	263
%	NNS	超級計	33.1	6.4	4.7	5.8	2.3	1.7	2.3	5.8	37.8	100.0
		上級計	36.3	15.7	8.8	6.9	0.0	4.9	1.0	3.9	22.5	100.0
		中級計	58.1	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	3.2	6.5	29.0	100.0
		計	36.7	8.9	5.6	5.6	1.3	3.0	2.0	5.2	31.8	100.0
	NS	計	43.3	30.8	9.9	7.6	0.4	0.8	3.0	1.5	2.7	100.0

①「要求・応答」の出現率は、NS 計で 43.3%、NNS 計で 36.7%を占め、いずれももっとも高いが、NS、NNS とともに個人差が大きく(資料 B 参照)、NS と対比して NNS の習熟度レベル別の違いは明らかではない。⑨「単純判叙文」は、特別な機能も形式的な特徴もない、

単純な説明的な発話であるが、NS 計の 2.7%に対して、NNS 計は 31.8%と高く、違いがきわだっている。また、それは上級(22.5%)より中級(29.0%)のほうが高く、超級(37.8%)でもっとも高い。②「思い出し・気づき・初耳・驚き」も NS 計で 30.8%，NNS 計で 8.9%と相違が大きい。NNS もレベルにより差があり、中級ではゼロであるが、上級(15.7%)では NS の半分の割合であり、超級(6.4%)ではさらに低い。③「ひとり言的・話しながら確認」は NS 計で 9.9%，NNS 計で 5.6%，④「同調・共作」は NS 計で 7.6%，NNS 計で 5.6%と、いずれも合計では大きな相違はないものの、NNS は、中級ではゼロで、上級でもっとも高く、超級でまた低いという、②と共通の特徴がある。そのほかでは、⑧「丁寧」で超級が 5.8%になっていること(超級の 1 名が丁寧体を常用しているため)などが特徴である。なお、表 5 は普通体・丁寧体の合計であるが、丁寧体は NS、NNS とともに、⑧「丁寧」の他には、①「要求・応答」の約 10%を占め(応答のみ)、③「ひとり言的・話しながら確認」、④「同調・共作」、⑦「強調(各種形式)」にも少数含まれている。

したがって、①「要求・応答」を除いて、NS では②「思い出し・気づき・初耳・驚き」がもっとも高く、NNS では⑨「単純判叙文」がもっとも高いことが最大の特徴である¹⁴。なお、NNS の「単純判叙文」の一部には、高(2008)が指摘するような終助詞の過少使用の問題があると考えられる¹⁵。

NS、NNS それぞれの特徴がよく現れている②③④⑨について、図 2 により NNS の習熟度レベルに応じた変化を見てみる。中級では⑨「単純判叙文」の使用がほとんどであるが、上級になると⑨「単純判叙文」が減り、②③④の各機能を帯びた用法が増えて、NS の出現率にやや近づく。しかし、超級になるとまた⑨が増え、②③④が減って、NS の出現率から再び大きく離れる。

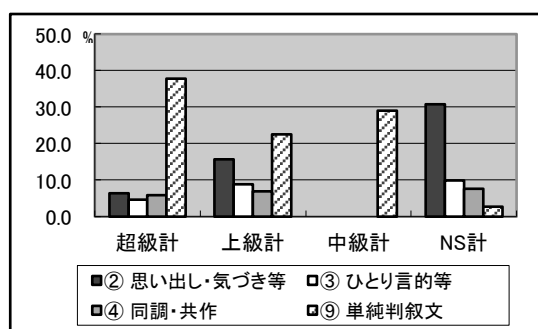


図 2: 動詞等 φ 形の機能の出現率(レベル別)

4.3 個人別分析

主要 3 種類の出現率と「動詞等 φ 形」の各機能(以下②③④⑨に限定する)の出現率を、特に後者に焦点を当てて、個人別に分析する(次ページ図 3～図 6 参照)¹⁶。なお、図 3 と図 5 の NNS のグラフにも比較の便宜のため NS の合計(平均)を表示してある。

(1) NS

主要 3 種類の出現率は、図 4 のとおり 14 名中 J04、J09、J10、J12、J14 の 5 名を除いては「終助詞」がもっとも高く、特に超級の NNS と会話した NS にその高さが目立つ(例えば J03 は 51.6%，J01 は 47.6%)。彼らは相手の日本語能力をあまり気にせずに話すことができたはずなので、もっとも母語話者の特徴が現れているものと考えられる。「動詞等 φ 形」の機能の出現率では、図 6 のとおり J04、J05、J06、J10、J14 の 5 名を除いては⑨「単純判叙文」は出現していない。

まず例外的なケースの 1 人 J14 について見てみる。J14 は、NS 中で「動詞等 φ 形」の出現率(33.8%)がもっとも高く、⑨「単純判叙文」も 2 件発生しているが、これはコミュニケ

ーションのまだ困難な L14 との会話のため、言語的調整、いわゆるフォリナートーク¹⁷を行っているためと考えられる。J14 は例 1 の話順 117 で「動詞等 φ 形」により質問してい

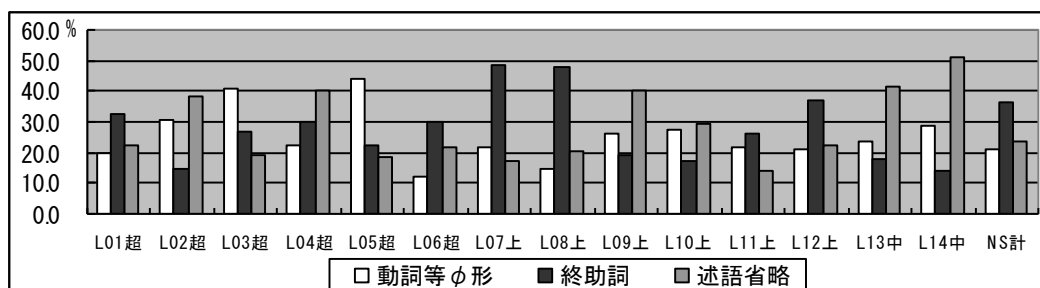


図 3：主要 3 種類の出現率 (NNS)

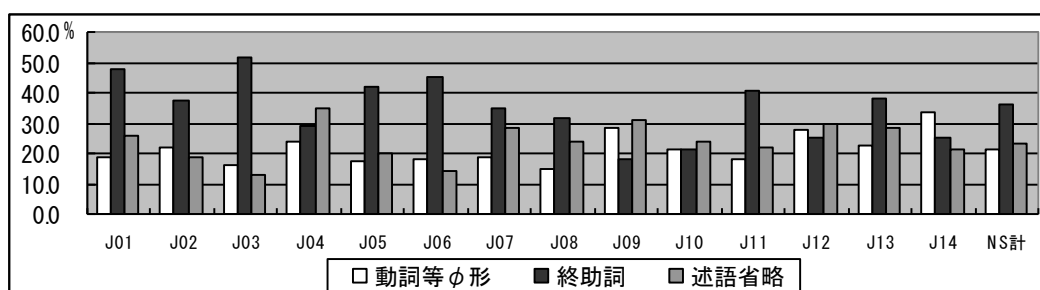


図 4：主要 3 種類の出現率 (NS)

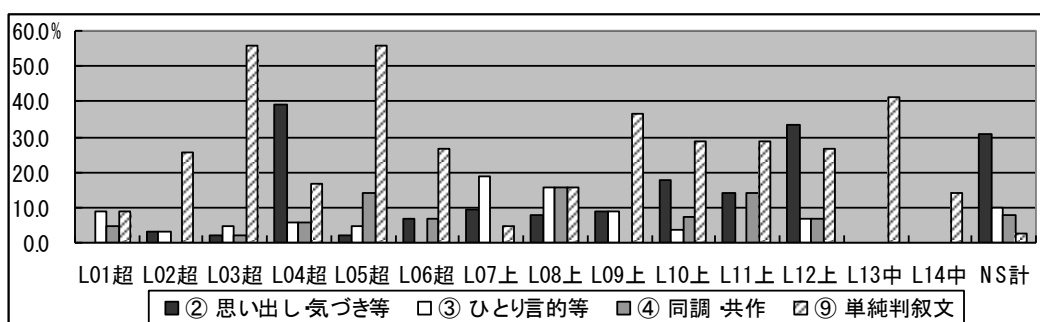


図 5：動詞等 φ 形の機能の出現率 (NNS)

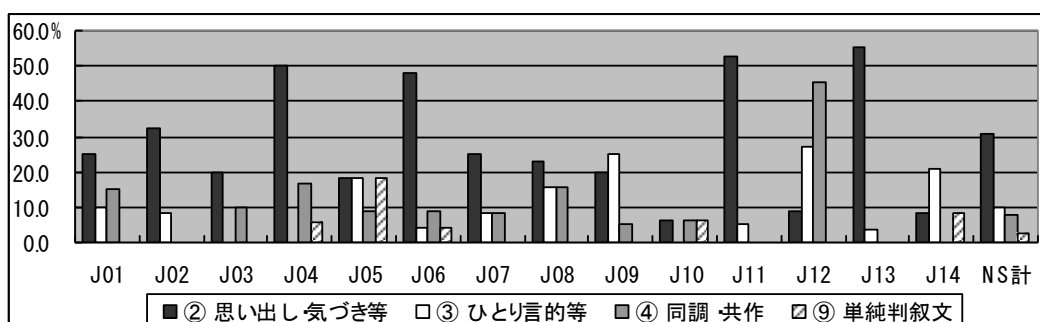


図 6：動詞等 φ 形の機能の出現率 (NS)

るが、純粋な質問ではなく、相手の発話を完成させている内容である。このような状況から例 1 話順 121 の下線部分のような「単純判叙文」が発話されているのではないか。

NS の「単純判叙文」の例をさらに見てみよう。J05 も 2 件発生しており、例 2 の話順 085, 089 で「こわーい」「初めて見た」と単純判叙文を発話しているが、どちらも発話に続けて笑っている。J10 は 1 件で、例 3 の話順 019 で「満足してるー」と単純判叙文を発話しているが、語尾を伸ばしている。他に例文は省略するが、J04 に、一応「単純判叙文」に分類したが、「動詞等 φ 形」ではなく連体形かもしれないものが 1 件、J06 に、笑いながら発話し、発話後も笑っているものが 1 件あった。以上から、NS の「単純判叙文」は特殊な場合にしか発生しないのではないかと推測される。

(2) 中級

主要 3 種類の出現率は、図 3 のとおり L13, L14 とともに「述語省略」(それぞれ 41.7%, 51.0%)が高く、「終助詞」(それぞれ 18.1%, 14.3%)が低いことが目立つ。例 4 の各下線部分のような単語羅列的な体言止めや、例 5 の話順 002 のような語彙の問題による体言止めなど、文を完成できずに「述語省略」になることが多い。また、例 5 の話順 004, 010 ように、文を完成した場合も「動詞等 φ 形」となることが多い。「動詞等 φ 形」の機能の出現率では、L13, L14 とともに図 5 のとおり⑨「単純判叙文」(それぞれ 41.2%, 14.3%)ばかりで、②③④はまったくない。

以上から、中級では単純に文を組み立てることが最優先課題で、それができない場合は単語の羅列によってでもコミュニケーションを図っていると考えられる。したがって話し方や文末等に関する言語意識においては、FUI でも分るように、文法的正しさについては意識する(L14)が、普通体・丁寧体の使い分

例 1 漫画やゲーム

- 115 J14 うんうんうんうん。
**漫画読まないの？。
116 L14 あんまり。
117 J14 あんまり読まない？。
118 L14 <笑い>ゲームも、ふふ。
119 J14 ああ、そうかそうかそうか。
120 L14 うーん。
121 J14 ゲームね、ふふ。
わたしの弟がいつもやってる。<笑いながら>

例 2 ゴキブリ

- 084 L05 そうそうそう。<当地で初めてゴキブリに遭遇した二人が、駆除は無理だと話す>
[[無理だよ。]]
085 J05 [あれは、]] 無理。
こわーい。<笑い>
086 L05 そうそうそう。
しかも、なんかちつ、ちゃくてー、スビードが速い。
087 J05 ね。
088 L05 そうそう、これは [[気持悪い]]
089 J05 [初めて見た。]] <笑い>(そうそう) あんなー、動きするのは、(わー)初めてで、…。

例 3 留学しない理由

- 015 J10 xxx んで、英語もしゃべれないですし。(あー)
016 L10 ちょっと寂しがり？。
ふふん？。
寂しがり屋？。
017 J10 どうなんでしょう。
018 L10 もう、でも、寂しく、うーん…。
019 J10 もう、日本で、十分かって h(あー)、まあ満足してるー。(あー)

例 4 試験やレポート

- 059 J14 [[まだあるんだ。]] <笑いながら>
060 L14 [ある。]]
あした発表。(＜笑い＞)
でもグループ。
．．．．．
064 L14 少し、*話す、少し、発表、ひとり。
*グループ、*で、でも、ひとり、ひとり、
065 J14 うんうんうん。
066 L14 が、ひとりずつが発表。

例 5 チェス

- 001 J13 L13 さんは？。
002 L13 わたし、あの、チェーサ、チェーサ。
003 J13 チェス？。
004 L13 うん、はい。
こうやって、とる。
005 J13 できるの？。
．．．．．
010 L13 なんか家族みんなでやる。

けなど話し方は気にしていられない(L13)状況であると考えられる。

(3) 上級

主要 3 種類の出現率では、図 3 のとおり 6 名中 L09, L10 を除いた 4 名は「終助詞」がもっとも高く、NS に似た出現率となっており、その内 L07, L08 は、「終助詞」の高さが目立つ(それぞれ 48.5%, 47.7%)。例えば L08 は、例 6 のように主要な「ね」「よ」「よね」がすべて現れている。また、L07, L08 にのみ終助詞の誤用が散見される。例 7 では、話順 107 でテレビを見たかどうかたずねているが、あらかじめそれが話題になっていたわけではないので、終助詞「の」は不要である(話順 109 以降で具体的な番組の話になる)。本調査に限らず一般的に終助詞の誤用が目立つのは上級レベルであると考えられる。一方、「動詞等 φ 形」や「述語省略」が「終助詞」より高い L09 と L10 は、中級に似た出現率になっているが、それはむしろ、後述する超級のように独自の規範を確立していることによるのではないかと推測される。「動詞等 φ 形」機能の出現率では、6 人とも②③④が NNS のなかでは比較的高い(図 5)。

なお、話し方や文末等に関する言語意識については、FUIで上級の 6 名中 3 名(L08, L10, L12)が普通体・丁寧体の使い分けを意識していると答えているが、その他の規範意識については、L10 が若者ことばやスラング、方言に違和感を覚えると述べているのを除き、特に確認できなかった。

(4) 超級

主要 3 種類の出現率では、図 3 のとおり L01 は NS 計に近く、L06 も比較的 NS 計に近いが、他の 4 名は「動詞等 φ 形」あるいは「述語省略」が「終助詞」より高く、NS 計とはさまざまに異なっている。また、「動詞等 φ 形」の機能の出現率では、図 5 のとおり L04 は②が高いなど比較的 NS 計に近いが、他の 5 名は上級以上に NS 計とは異なっており、特に L03, L05 の「単純判叙文」の出現率(ともに 55.8%)の高さが目立つ。

例 6 スリランカ

- 024 L08 [インドの]], 南ほうにある, (うーん) ちっちゃいの, 島国 [[なんだけどね]]
 025 J08 [そうですね。]]
 026 L08 うーん。
 027 J08 日本も島国だし。(h h)
 028 L08 でも日本がやっぱり大きいですよね。
 029 J08 [[そうですね,]
 030 L08 [スリランカは,]] すごく, [[ちっちゃいですよ。]

例 7 テレビ

- 105 L07 ところで,
 106 J07 うん。
 107 L07 ゆうべテレビ見たのの?。
 108 J07 きのうー, 木曜日, 見た見た見た。

例 8 夜型人間

- 040 L03 夜の人って [[今いった x。]
 041 J03 [あーあーあーあー,]] なるほどね。夜型人間ってことか。
 042 L03 うん。
 043 J03 はー。
 044 L03 夜, 元気になる。
 045 J03 はーっ。<笑い>
 046 L03 すごいね, あれ。(＜笑い＞) ほんとに, なぜか分からない。夜, ほんとに, (うーん)頭が, ものすごく, (うーん)働く, 働ける。

例 9 暗黙ルール

- 038 L05 バイトはね, うん,
 039 J05 勉強になるっていうんで?。
 040 L05 そうそう, すぐわかる。そういう, なにの, 日本の(うん), 暗黙ルール, [[というかな,]
 041 J05 [はいはい,]] 暗黙の了解。
 042 L05 そうそう(うんうん), そういうのは, よく, よくわかってきた。(うーん)

例 10 当会話収録の話

- 202 L02 *ねー, この日の夢を見た。<話題が変わったところ>
 203 J02 きょう会うってこと?。
 204 L02 うん。
 205 J02 わたしに会い [[たかった x x。]
 206 L02 [うーうん, その,]] [[録音してるところ。]
 207 J02 [あー。]]
 208 L02 うん緊張じゃない。
 208 L02 ただ, どうなるかなーと思ってた。

L03 は、例 8 のように自分が説明している場合には「単純判叙文」(下線部分)が多く、逆の場合には「終助詞」が多くなっている。この会話では、L03 が話し手、J03 が聞き手となる場合が多かったため、L03 の「単純判叙文」が多くなっているものと考えられる。FUI で L03 は、母語のスペイン語でのように早口に話そうとするので、おかしな日本語になってしまうが、話し方よりもスムーズに会話を進めるほうを重視している(以下個人的な規範と考えられるものに下線を付す)と語っている。したがって、自分が説明する場合には、発話を急ぐ気持ちから内容優先で「単純判叙文」になっていると考えられる。また L03 は、「中学生の日本語ではない、ちゃんとした日本語」を話そうという意識があり、自分の言いかたを決めているとのことなので、かなり意識して採られている発話スタイルであると言える。

L05 も、例 9 のとおり「単純判叙文」(下線部分)が多い。先の例 2 では話順 086, 088 で「スピードが速い」「気持ち悪い」と「単純判叙文」を発話しているが、母語話者であれば、どちらも同意を求める「ね」を付加するのではないだろうか。FUI で L05 は、文末は「ね」など付けると自然に感じるが、あまり意識していないと語っている。L02 も例 10 のとおり「単純判叙文」(下線部分)が比較的多い。話順 202 は L02 が話題を変えたところであるから、母語話者であれば「夢を見たよ」など何か別の表現を使うのではないだろうか。L01 は、相手が普通体で話しても自分は丁寧体で話すという特徴がある。FUI で、なるべく丁寧体で話したい、普通体は抵抗があると語っているが、L03 以上に意識された発話スタイルであると言える。他には FUI で、L06 は「～ないと思います」「～させていただきます」のような言い方に違和感を覚えると述べており、L04 はネイティブと区別が付かないほどになりたいと述べている。

超級でも 6 名中 2 名(L04, L05)が普通体・丁寧体の使い分けを意識しているが、そのほかに上記下線箇所のように独自の規範意識(L01, L03, L06)が確認された。文末表現に影響していると思われる規範意識がはっきり確認できたのは L01, L03 のみであるが、以上から、超級になると日本語使用についての個人的な規範が目立ちはじめるといえるのではないかな。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本語学習者と母語話者との自由会話の文末表現について調査し、その結果、①日本語学習者の各文末表現の出現率は、中級では母語話者と大きく異なり、上級では母語話者に近づくが、超級ではまた離れてしまうという可能性のあること、②母語話者ではほとんど現れない「単純判叙文」が日本語学習者では多く、それも超級において著しいということ、そして、③超級になると日本語使用についての個人的な規範が目立ちはじめるということを指摘した。超級になると学習者は母語話者の規範とは異なる独自の規範を作り上げ、必ずしも母語話者のように話すことを目指さないのではないだろうか。また、それによりこのような超級の特徴が現れるのではないだろうか。

本調査の問題点として、調査対象者が少ないこと、データの統制が十分とれていないこと、FUI のデータが不十分なこと¹⁸が挙げられる。そのため上級から超級への興味ある変化については、可能性として指摘するにとどまった。また、母語話者については、母語場面での調査を行っていないので、純粋にその特徴が現れているとは限らないが¹⁹、対比し

て日本語学習者の特徴を明らかにする上ではある程度有効であったと考える。さらなる調査を進め、確証を得ることを今後の課題としたい。

参考文献

- ファン, S.K. (2002). 対象者の内省を調査する(1): フォローアップ・インタビュー ネウストプニー, J.V.・宮崎里司(編) 言語研究の方法: 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために くろしお出版 pp.87-95.
- ファン, S.K. (2003). 日本語の外来性(foreignness): 第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から 宮崎里司・マリオット, H.(編) 接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト 明治書院 pp.3-21.
- 伊集院郁子 (2004). 母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違— 社会言語科学 6(2) pp.12-26.
- 加藤好崇 (2010). 異文化接触場面のインターアクション 東海大学出版会
- 高民定 (2006). 文法能力の規範についての一考察—接触場面の受身の生成を中心に— 村岡英裕(編) 多文化共生社会における言語管理—接触場面の言語管理研究 vol.4— 千葉大学大学院社会文化科学研究科 pp.91-102.
- 高民定 (2008). 接触場面における終助詞の言語管理—非母語話者の終助詞「ね」と「よ」の使用を中心に— 村岡英裕(編) 言語生成と言語管理の学際的研究—接触場面の言語管理研究 vol.6— 千葉大学大学院人文社会科学研究科 pp.97-112.
- 国立国語研究所 (1960). 話しことばの文型(1)—対話資料による研究 秀英出版
- 窪田光男 (2005). 第二言語習得とアイデンティティ: 社会言語学的適切性習得のエスノグラフィー的ディスコース分析 ひつじ書房
- 黒沢晶子 (2010). 「名大会話コーパス」に現れた文末形式—普通体と丁寧体に違いはあるのか— 山形大学留学生教育と研究(2) 山形大学国際センター pp.3-11.
- 牧野成一ほか (2001). ACTFL-OPI 入門: 日本語学習者の「話す力」を客観的に測る アルク
- メイナード, 泉子・K. (1993). 会話分析 くろしお出版
- 峯布由紀 (1995). 日本語学習者の会話における文末表現の習得過程に関する研究 日本語教育 (86) pp.65-80.
- 村岡英裕 (2006). 接触場面における社会文化管理プロセス—異文化の中で暮らすとはどのようなことか— 国立国語研究所(編) 日本語教育の新たな文脈 アルク pp.172-194.
- ネウストプニー, J.V. (1981). 外国人場面の研究と日本語教育 日本語教育(45) pp.30-40.
- ネウストプニー, J.V. (1995). 新しい日本語教育のために 大修館書店
- 大曾美恵子 (1986). 誤用分析 1「今日はいいい天気ですね。」—「はい、そうです。」 日本語学 5(9) pp.91-94.
- 杉戸清樹 (1992). 言語意識 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹(著) 社会言語学 桜楓社 pp.113-134.
- 上原聡・福島悦子 (2004). 自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法 世界の日本語教育(14) pp.109-123.

宇佐美まゆみ (1997). 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について <<http://nihongo.human.metro-u.ac.jp/mic-J/houkokusho/mojika.html>> (2005 年 8 月 15 日)

渡辺由貴 (2007). 「と思う」による文末表現の展開 早稲田大学日本語学会(編) 早稲田日本語研究(16) 早稲田大学国語学会 pp.37-48.

資料

資料 A : 文末表現集計表(個人別)

			動詞等 の形	終助詞	助動詞	接続形式	接続助詞等	て形等	述語省略	語尾等省略	名詞・助詞 名詞・形式名	名詞	形式名詞	連用修飾語	連体修飾語	終助詞「か」	依頼・命令形式	発話打ち切り	計	
NNS	超級	L01	22	37	4	10	7	3	25	4	2	13	0	6	0	9	1	5	113	
		L02	31	15	9	6	5	1	39	2	2	32	1	2	0	0	1	1	102	
		L03	43	28	2	6	6	0	20	4	4	9	0	3	0	1	1	4	105	
		L04	18	24	1	4	2	2	32	8	9	10	0	4	1	0	0	0	1	80
		L05	43	22	8	3	2	1	18	7	4	5	0	2	0	0	0	4	98	
		L06	15	37	13	25	23	2	27	2	7	18	0	0	0	1	0	5	123	
	上級	L07	21	47	1	8	4	4	17	4	1	8	0	4	0	0	0	3	97	
		L08	13	42	0	7	7	0	18	2	4	11	0	1	0	5	1	2	88	
		L09	11	8	2	0	0	0	17	3	6	6	1	1	0	2	2	0	42	
		L10	28	18	5	12	10	2	30	3	4	19	1	3	0	3	4	3	103	
		L11	14	17	9	11	11	0	9	2	0	6	0	0	1	1	0	4	65	
		L12	14	25	10	3	3	0	15	5	2	5	0	3	0	0	0	0	67	
	中級	L13	17	13	0	3	3	0	30	4	4	19	0	3	0	2	0	7	72	
		L14	14	7	0	2	1	1	25	8	6	9	0	2	0	0	0	1	49	
NS		J01	20	50	2	6	4	2	27	5	1	13	1	5	2	0	0	0	105	
		J02	37	63	14	18	11	7	32	5	5	10	4	6	2	1	1	3	169	
		J03	10	32	3	6	4	2	8	2	1	5	0	0	0	2	0	1	62	
		J04	18	22	1	4	2	2	26	0	8	14	0	3	1	2	0	2	75	
		J05	11	27	1	8	7	1	13	5	3	5	0	0	0	0	0	4	64	
		J06	23	57	15	9	8	1	18	2	5	8	0	2	1	1	1	3	127	
		J07	12	22	2	4	3	1	18	3	4	8	1	2	0	0	0	5	63	
		J08	13	28	0	16	10	6	21	4	6	8	0	3	0	7	0	4	89	
		J09	20	13	8	8	7	1	22	3	2	12	0	5	0	0	0	0	71	
		J10	16	16	5	8	5	3	18	2	5	9	0	0	2	9	1	3	76	
		J11	19	43	7	8	5	3	23	4	5	11	0	1	2	2	0	4	106	
		J12	11	10	1	3	1	2	12	3	0	6	0	2	1	0	0	3	40	
		J13	29	49	7	2	2	0	37	3	6	26	1	1	0	3	0	2	129	
		J14	24	18	5	1	1	0	15	2	3	10	0	0	0	5	0	3	71	

資料 B : 動詞等 φ 形機能集計表 (個人別)

			① 要求・ 応答	② 初耳・ 驚き 思い出し・ 気づき	③ 話しながら 確認 ひとり言的・	④ 同調・ 共作	⑤ 眼前描 写・回 想	⑥ (助動 詞的) 推測	⑦ (各 種形 式) 強調	⑧ 丁寧	⑨ (単 純判 叙文) その他	計
NNS	超級	L01	6	0	2	1	0	1	2	8	2	22
		L02	20	1	1	0	0	0	1	0	8	31
		L03	8	1	2	1	4	1	0	2	24	43
		L04	6	7	1	1	0	0	0	0	3	18
		L05	9	1	2	6	0	0	1	0	24	43
		L06	8	1	0	1	0	1	0	0	4	15
	上級	L07	11	2	4	0	0	3	0	0	1	21
		L08	4	1	2	2	0	0	0	2	2	13
		L09	4	1	1	0	0	1	0	0	4	11
		L10	9	5	1	2	0	1	0	2	8	28
		L11	6	2	0	2	0	0	0	0	4	14
		L12	3	5	1	1	0	0	1	0	4	15
	中級	L13	9	0	0	0	0	0	0	1	7	17
		L14	9	0	0	0	0	1	1	1	2	14
NS		J01	10	5	2	3	0	0	0	0	0	20
		J02	21	12	3	0	0	0	1	0	0	37
		J03	7	2	0	1	0	0	0	0	0	10
		J04	3	9	0	3	1	0	1	0	1	18
		J05	4	2	2	1	0	0	0	0	2	11
		J06	8	11	1	2	0	0	0	0	1	23
		J07	7	3	1	1	0	0	0	0	0	12
		J08	5	3	2	2	0	0	1	0	0	13
		J09	9	4	5	1	0	1	0	0	0	20
		J10	9	1	0	1	0	0	0	4	1	16
		J11	7	10	1	0	0	1	0	0	0	19
		J12	2	1	3	5	0	0	0	0	0	11
		J13	8	16	1	0	0	0	4	0	0	29
		J14	14	2	5	0	0	0	1	0	2	24

¹ 杉戸清樹(1992)は、日本の社会言語学で言語意識は「言語そのものないし言語行動についての評価・感覚」「言語使用ないし言語行動についての志向意識」など5つの領域・観点において調査研究されてきたと述べている。

² 「接触場面」および「母語場面」についてはネウストプニー(1981,1995)などを参照。

³ フォローアップ・インタビューとは、「録音や録画で反映されない対象者の調査時の意識や考え方を明らかにしようとする目的で行われ、調査データを質的に補足する」(ファン 2002:88)ものである。

⁴ できるだけ自然な会話を採取するため、開始後5分間(会話がまだ軌道に乗っていない可能性を考慮)と終了前5分間(終了時間を意識して会話が停滞している可能性を考慮)を除外して、中間の10分間だけを文字化した。

⁵ 文字化規則は、宇佐美まゆみ(1997)「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)の開発について」をベースとして多少の変更を加えた。

。 文末(すべての文の終わりに付ける)。

[[], []] 同時発話部分を囲む(先の記載行に [[], 後の記載行に []] を使用)。

() 短く、特別の意味を持たないあいづち。

< > 笑い声や内容理解に必要な説明。(<笑い>)はあいづち的な笑い声。

* 息継ぎなどの区切りより長いポーズ(1字につき約1秒)。

x x x 聞き取り不能であった部分に、推測される拍数に応じて x を記入。

h 文末等の息の音。

小さい活字 ごく弱く、かつ、ごく速く発音されている部分。

... 発話打ち切りを表す。

⁶ ACTFL(The American Council on the Teaching Foreign Languages)が開発した言語タスク遂行能力測定基準であり、これについては牧野ほか(2001)を参照した。なおレベル判定は、OPI(Oral Proficiency Interview)は行わず、収録会話と FUI の会話の特徴をこの基準に照らし合わせるにより、筆者が行った。複数人による判定が望ましかったが、各レベルの差異が鮮明であり、判定結果に問題はないと考える。

⁷ クラス分けは、授業内容を意識した、独自基準に基づく WEB プレースメントテスト(日本語に関する自己評価と語彙・文法等に関する問題)により行われている。

⁸ 自然な日常会話を収録するため、NNS には、できるだけ親しい同性の日本人学生とペアで調査に協力してほしい旨依頼したが、NNS によっては困難な依頼であったようで、結果はこのようになった。

⁹ フィラー的な「なんだっけ」などの挿入文や「先週さ、あつ先週じゃない、きのう、応募出てたよね」のような言い直し文(下線部分)は、独立した文として扱わない。

¹⁰ メイナー(1993)もこれらの発話を集計から除外しているものと考えられる。

¹¹ 本稿では、動詞や形容詞等の終止形で終わっている文に共通の特徴を取り扱っているため、これらを一本化し、出現数のもっとも多い動詞を代表にして「動詞等 φ 形」と名付けた。

¹² 「～と思う」が助動詞的に使用されることについては渡辺(2007)を参照。

¹³ 国立国語研究所(1960)の分類の詠嘆表現は、感動詞によるものと形容(動)詞によるものがあり、後者には「動詞等 φ 形」の形式も含まれるが、本調査では「詠嘆」の分類を設けず、文脈により②「思い出し・気づき・初耳・驚き」や④「同調・共作」等に分類した(例:「すごい」を②に)。また、上原・福島(2004)では「裸の文末形式」から質問等の疑問文を除外している(「か」を伴ったものと同義と見なして)が、本調査ではそれらを「動詞等 φ 形」(①「要求・応答」)に含めた。

¹⁴ ②「思い出し・気づき・初耳・驚き」等の瞬時性や独話性の機能(表 3 参照)を合計すると、NS では 49%(①「要求・応答」と合わせて 92%)に、NNS では 21%(①「要求・応答」と合わせて 58%)になる。

¹⁵ 筆者が判定した限りでは、「今日はいいい天気ですね」「はい、そうです」(大曾 1986)ほどは不自然に感じる発話はなかったものの、母語話者であれば恐らく「ね」を付加するだろうと思われる文脈での「単純判叙文」が 4 件ほどあり、母語話者であれば「よ」を付加するか、別の表現にするのではないかと思われるものが 6 件ほどあった(両者ともすべて超級)。しかし第三者による判定も必要であろう。

¹⁶ 母語の影響を判断するには対象者数が不十分であるが、主要 3 種類の出現率と「動詞等 φ 形」の各機能の出現率において、韓国語母語話者 L06(超級)、L11(上級)はやや似た傾向を示しており、中国語母語話者 L01、L04、L05 は同じ超級でもまったく異なっている。なお、前記のとおり峯(1995)は、母語の影響よりも個人の会話スタイルや学習環境などが文末表現に反映されていることを指摘している(2-1 参照)。

¹⁷ 「フォリナートーク」についてはネウストブニー(1981:34-35)などを参照。

¹⁸ FUI では「日頃自分の話し方について何か気をつけていること、方針のようなものがありますか。特に文末について、例えば普通体・丁寧体の区別、ね・よ・けど等の使用などについてはどうですか」という主旨の質問をしたが、言語意識について十分聞き出すことはできなかった。細分して詳細に質問するなど、なんらかの工夫が必要であったと考える。

¹⁹ 母語場面と接触場面とで母語話者の発話の特徴が異なることは、前記のとおり伊集院(2004)も指摘している(2-1 参照)。したがって、NNS のデータをできれば母語場面のデータとも比較することが望ましかったであろう。母語場面のデータは、超級の NNS と会話した NS のデータの特徴に近いのではないかと筆者は推測している。